

# やまと 民俗への招待

のだった。  
渡り鳥の群れが、  
囮おとりの小鳥に網へ誘わ  
れる様子を見て、吉野  
の旧大塔村に伝わる物語  
を狂言を思い出した。

「鳥の道を越えて」というドキュメンタリー映画を見た。1979年生まれの今井友樹監督が8年がかりで作ったもので、故郷岐阜県東白川村で、祖父から聞いた渡り鳥の道と、調査目的でかううじて残る「カスミ網獣」を記録した興味深いものだった。

ここで大和の鳥刺しの親方が、「若い頃は向かいの山にかかくほどささやいた」と鳴きまねのうまさを述懐する場面がある。トリモチで鳥を刺す獵師は鳥を誘き寄せるため鳴きまねも堪能だったのだ。この鳥刺しに関わる言葉が春日若宮おん祭のわらべ歌に残っていることに気が付いた。

餅飯殿商店街（奈良市）の一郭にかつて大和の侍が精進潔斎した

春日若宮おん祭で、大宿所に供えられた  
「懸島」=奈良市餅飯殿町で、筆者提供

が供えられ、懸鳥(くびのとり)物」と呼ばれている。この様子を「せんじょ」といふ。まんじょといふ。せんじょの道にはなんにがある、尾のある鳥と尾のない鳥と、せんじょいこ(まんじょいこ)と歌つてゐる。この「せんじょ」は、「ここにあつた『遍照院』(へんじょういん)といふ。私は以前から「へんじょう」が「せんじょ」になまるだらうかと疑問に思つていた。

江戸時代の歌謡を集成した「江戸年刊歌謡集」(宝永7年)に、「松の落葉」には「やんらやんら樂しや、千町や萬町の鳥追が參り」といふ踊り歌がある。

「せんじょいこう」は、  
猿師たちが鳥を求めて  
「千町行こう、万町行  
こう」と歌った歌が、  
大宿所に鳥を献じる時  
に奈良の町に持ち込まれ、子供の歌となつて  
伝わったのではないか

# 狹の記憶わらべ歌に

(奈良民俗文化研究所  
代表・鹿谷勲)  
○次回は来年1月11日